

ウェンディー・ロジャーズ教授（証言者番号：39）

供述の要約：2018年12月10日（p.437～441）

[自己紹介]私の証拠は自分の研究に基づくもので、主に（オーストラリアの）シドニーでの文書研究です。近年は中国を訪れていませんし、臓器移植に関して実際に人と話すために中国を訪れたことはありません。

私の証拠から以下の2点を指摘します。1つ目は、中国共産党政権下での移植臓器のレシピエントに関する、発表された研究論文が、倫理基準に準拠していないということです。2つ目は、個人的な体験ですが、移植医学界が強制臓器収奪の疑惑に目を向けないことへの懸念です。

第1点の中国の移植論文が倫理基準に準拠していないことは、私が他の調査者と共に行ったプロジェクトを基盤とします。中国での研究が、国際移植学会・WHO・世界医師会の掲げる倫理基準に準拠しているかを調査するものでした。これらの機関が発表した文書や声明を基に、レシピエント（移植手術を受けた患者）から得たデータに関する3つの基準が幅広く受け入れられるようになりました。第1の基準は、研究は処刑された囚人からの生体試料に関わらないこと。第2の基準はレシピエントが関与する研究は、研究倫理委員会（審査委員会）の承認を受けること。第3の基準は、移植関連の研究はドナーの合意をもって初めて進めることができること。2006年、中国共産党が処刑された囚人を臓器源とすることを公認して以来、これらの基準は明確になりました。そこで、中国の論文がこれらの基準に準拠しているかを調べました。12ヶ月にわたりボランティアの調査チームと共に、スコーピング・メソドロジーを用いて調査した結果、肝臓、肺、心臓の移植臓器に関わる研究報告の論文を445見出しました。腎臓に関しては、死体ドナーか生体ドナーか明示されていないので外しました。これら445の該当論文のうち、処刑された囚人の臓器を研究に用いていないと記述している論文があるかを調べていきました。結論は、2017年1月から4月の間に発表された公表された論文のほとんどは、囚人から得た臓器データを基盤とする研究は除外するという倫理基準に準拠していませんでした。さらに憂慮すべきは、臨床や研究に関わる者、医学雑誌の編集者が、倫理基準への準拠に無関心に映ったことです。国際的な移植医学界が、中国での移植研究における臓器源に対する最も基本的な監視や聴き取りをする気配すら感じられませんでした。私の捉え方は概括的で、実際に拒否された論文もあるのかもしれませんが、しかし、臓器は処刑された囚人のものであることが公にされている中で、ほとんどの研究は臓器源に言及していませんでした。

第2点として指摘したいことは、移植医学界のメンバーが中国での強制臓器収奪の疑惑を調査しながら、全く無知であるようだと言ったことと個人的に体験したことです。同時に中国の制度は倫理的であり、強制臓器収奪は噂に過ぎないとし、臓器収奪を一蹴し、中国のスポークスパーソンによる否定と類似した公式否定を繰り返しています。[公式発言の幾つかの例を列挙]。この返答に驚きました。（中国では）移植病院が600軒あります。1軒の病院を訪れて見当たらなかったのに、このようなことが起こっているとは言えません。単に一蹴する返答のようでした。実際、2015年11月以降、チャップマン教授の否定的な語調が強くなりました。公に残された記録があります。豪州上院「外務貿易合同常設委員会」の諮問でチャップマン教授は、『2016年報告書(An Update)』（キルガー、マクス、ガットマン共著）にある年間移植

件数 6 万～10 万 という推定値を「でっちあげ(concoction)」としています。人を軽視する表現に思われます。『2016 年報告書』の算出方法を見ると、複数の情報源を基盤とし、誤差を幅広く設けて、クロスチェックし、中国公認の数値よりはるかに大きい移植件数を割り出しています。[8 万 5 千件の移植に関する 445 の論文について、これらを言及された 3 つの倫理基準に振り分けてもらいたい。例えば 6 つの論文で言及されている移植の中で何件がドナーの合意を報告しているか]。あとで提出します。

[履歴の説明]オーストラリアの保健倫理委員会のメンバー、臓器提供における倫理指針を作成するグループのメンバーとして、この問題について認識するようになりました。

調査した論文の著者にさらなる情報を求めることは、我々の調査範囲外でした。該当論文は全て見出されましたので、我々の調査結果を基に他の方が行動されるよう期待します。他の 2 つの倫理基準に関しても同様に、著者自らが応答することも、調査者が著者に直接連絡を入れることも全く自由です。過去に一度、論文撤回に取り組みましたが、時間と労力を要した長期的な作業でした。ですから個々の論文を追及するより、他の人が追及できるようにこの問題を幅広く捉えることにしました。論文撤回の過程で臓器源は断定できませんでした。最終的に共同著者のシニアメンバーがジュニアメンバーによる何らかの誤りだったと主張しました。2 回目の手紙のやりとりの後のことです。最初の返答は我々の主張を退けるものでした。その後、黄潔夫（中国の移植担当スポークスマン）が著者と話し、間違いだと言ったという報道がありました。我々の交信での言葉とは異なりました。メディアが伝えた内容です。

全ての論文で、臓器源はほとんど明示されていませんでした。説明に苦しみます。他の人が教えてくれた洞察には裏付けがありません。（なぜこのようなことが起こっているのか）自分の見解を抱くようになりました。第一は（黄潔夫と）オーストラリアの関係があります。黄潔夫はオーストラリアで移植手術をしており、ジェレミー・チャップマンとは仲間として共に仕事をしています。自分に反感を抱いているなど感じる相手より、友人の言葉のほうが受け入れやすいのでしょうか。人間は身近に仕事をしたことのある者を信じる傾向にあります。この状況では、馴染みのある人を信じ、中国が変革する機会に援助と励ましが必要だと感じるに違いありません。特に過去 2 回の国際移植学会の大会で、中国は暖かく受け入れられ、倫理基準への準拠を実践する気配はなかったと見受けれます。ジェレミー・チャップマン教授は私にこう言いました。「香港での国際移植学会で全ての論文に目を通した」。彼を疑う理由はありませんが、これは大海の一滴に過ぎません。非倫理的な移植手術に基づく研究論文一つ一つが、世界で参照されている可能性があり、さざ波の始まりになっているのです。

省みるよりも過去のことは忘れる — 彼らのやり方ですが、ここに問題があります。まず、彼ら自身が「悪事」の深さを認めていない。第二の点は、ほぼ一夜にして制度を変革するという起こりえないことを考えつく。

世界の他の国の態度は様々です。例えばカナダにはこの問題を懸念する移植医の実質的なグループがあり、自分の大学から圧力があっても、中国の大学との研究協力の合意を拒否しています。英国ではバーミンガムの『人体展』を批判しています。イスラエルではジェイコブ・ラヴィー医師が臓器移植で

渡航する患者に対して（イスラエルの）保険会社が保険金を支払うことを阻止する法律制定を積極的にリードしました。シドニーはこの流れから外れているようです。ブリズベンで講演するように招かれたのですが、聴講者の関心が高く満席でした。シドニーの悲劇は、ビル・オコネル氏とジェレミー・チャップマン氏が近年の国際移植学会の会長であったことです。彼らは臓器収奪の指摘を一蹴するように率先し、臓器収奪を指摘する者は「誤って導かれた人権擁護者であり、中国政府の転覆をはかる政治的動きに騙されている」と報告しています。

特定の論文が単に見落とされた可能性があるかどうかについては、何が拒絶されたかを把握していませんので、回答は難しいです。比較的重要な医学雑誌の中で、20の論文のうちのほとんどが臓器源の言及がない場合もあります。医学雑誌の編集者の多くが認識していることは考えられますが、向上の余地はかなりあります。私の経験ですが、このおぞましい疑惑を認識した医学雑誌の編集者が、著者に連絡し、論文撤回の意図で詳しく読み直しました。しかし、医学雑誌の出版社から押し戻されました。編集者と共になんか気を配った交渉を重ねて、論文撤回に至りました。中国からの収入がかなりあるので、この医学雑誌が論文を撤回することは大変なことでした。かなりの向上の余地があると思います。ドナーの詳細の記載義務を設ける基準を移植医学界が合意することは有益でしょう。基準があれば「全てのドナーは20歳から40歳の健康な男性である」とする論文を中国の医師が発表することが難しくなるからです。

（中国で使用するドナーの）同意書は持ち合わせていません。中国語はできませんので見ても実証できませんが、実際に見たことはありません。

隠蔽かどうかは分かりません。チャップマン教授は改革が起こったと信じていると思います。しかし、潜在意識や自分で引き起こす心理的な錯覚という説明はつきます。中国に騙されてきた人間になるより、自分が良く思われるような見解に立つことは人間の本性です。チャップマン教授が中国で起こっていることを直接把握していながら隠蔽したとは思っていません。全くありえないと思います。

医学研究界での告発者については把握していません。「ジュニアメンバーの誤り」とされた論文撤回のみです。公表されている情報はあまりありません。論文撤回を試みた精神医学に携わる人々とかなりの対話を重ねたことがあります。実に難しい作業です。不正行為の過程は見つけにくく、疑惑を追及すると大論争になりますので、論文が撤回されることは稀です。

動機についてですが、複数の移植分野にわたり医師が敢えて気づかないふりをしていることが、明白な事実を直視する能力を失わせていることは考えられます。研究が興味深いものかは私には理解できませんが、移植技術の最先端であることは確かです。論文撤回の要請に対する最初の回答は「中国ではどこにも勝る臓器数が摘出できる」というものでした。オーストラリアでは心停止後のドナーからの肝臓摘出はとても困難です。低血圧の時間を経過するため、死亡した時点で肝臓は移植に適しません。肝臓の摘出率100%と主張する中国では、オーストラリアやアメリカとは全く異なる形でドナーが死んでいることが明らかです。中国の制度の改革に務めることが動機と言えますが、上手くいかなければ逆に加担者となります。人を感化する背後には多くの理由が考えられます。公然とした利己心だけが理由ではない

と思います。賄賂は示唆しません。我々はよくやっていると自らを騙すことで、視野が極度に狭くなっている可能性があります。

チャップマン教授は「でっちあげ」という言葉を用い、動機は政治的だと主張した時もありました。法輪功が中国政府を転覆する意図で作上げたものであり、政府を攻撃する一環として強制臓器収奪を拡散しているという内容です。

調査は私と他6人のチームで行われました。私以外で医療の有資格者が1人、博士号取得者が数人、元ジャーナリストと生命倫理専攻の学者でした。他にこのような調査をしている人がいることは認識していません。2016年末にチームを形成し、調査に18ヶ月以上かけています。ほとんどの論文は臓器源を明示していません。言及されている場合は、臓器は自主的提供によるとだけ書かれていました。

この問題に触れることに対する抵抗が、オーストラリアと中国との密接な関係に起因するのかは、私の専門外ですのでお答えできません。オーストラリアは中国の恩義をかなり受けています。研究協力面での中国の資金力にオーストラリアは動かされています。英語圏の中でもオーストラリアが特に中国寄りである理由でしょう。